

# 農事組合法人 うたえだ（豊後大野市清川町）

## 【経営の概要】

経営形態	生産組合（特定農業法人）
モデルの種類	平地モデル
設立時期	（総会）平成18年10月29日（登記）平成18年11月14日
構成戸数	19戸
労働力	基幹4名、補助15名

## 【経営規模 (ha)】

	経営面積	麦類	大豆	その他 (飼料作物)
		二条大麦		
平成19年	30.7	30.7	6.0	2.0
平成20年	30.9	30.9	7.9	3.0
平成21年	30.3	30.5	9.3	4.0

## 【機械装備】

普通型コンバイン	1台	管理機	3台
汎用コンバイン（キャビン付き大豆用）	1台	溝堀機	1台
トラクター	2台	ロータリーカルチャー	1台
目皿式播種機	2台		

## 【経営の特徴】

当地区は、昭和30年代から生産組織活動をはじめており、昭和48年からの県営ほ場整備事業、昭和54年からの土地整備事業を契機に有利な土地を活用した営農活動が行われている。昭和55年に宇田枝農業振興会を組織化し、平成18年に（農）うたえだを設立。麦・大豆の団地化、ブロックローテーションを進め、水田利用率は180%となっている。さらに、シートパイプの設置による生産安定、機械・施設の共同利用によるコスト削減に努めている。

## 【導入した新技術】

### ◎大豆の狭畦密植栽培技術

（手法）大豆の慣行栽培の条間70cmを35cmと狭く密植し、無培土、無中耕による低コスト栽培を行う。

（結果）

19年は、雑草の発生を抑制し倒伏もなく生育良好で慣行栽培より増収した。

20年は、7月上旬と播種時期が早く、徒長した。倒伏はなかったものの「つるぼけ」気味であり、ヘリ防除の風圧により一部倒伏した。収量は昨年より低下した。

21年は、播種適期の7月中旬に降雨があり8月上旬に播種時期がずれ込んだ。初期生育が遅れ雑草被害もあり収量は大幅に低下した。

（留意点）

・狭畦密植栽培については、通常播種時期での作付け体系では雑草管理や徒長などのリスクが大きいことから、降雨などにより播種時期が遅れた場合の収量確保に向けた緊急対策技術とする。



<狭畦密植栽培（H20）>



<狭畦密植栽培（H21）>

### ◎土壌分析に基づく土作り資材の投入

（手法）

麦、大豆の土壌分析に基づく土壌改良剤の施用

（結果）

19年11月に麦作付ほ場19点、20年7月に大豆作付ほ場16点について土壌分析を行った結果、いずれもpHは適正值であったため土壌改良剤の散布は不要であった。

20年11月に麦作付ほ場32点を調査した結果、pHが低下したほ場が多く、分析値に基づき土壌改良剤を施用した（苦土石灰散布量：0～200kg/10a）。

21年6月に大豆作付ほ場16点を調査した結果、分析値に基づき土壌改良剤を施用した（苦土石灰散布量：0～180kg/10a）。

（留意点）

・ブロックローテーションによる田畑輪作体系を基本とする。

### ◎簡易培土板による播種同時溝上げ栽培技術

（手法）

一部排水不良な水田があるため、省力的な排水対策として播種機に簡易培土板を装着して麦・大豆の播種同時溝上げ技術を実証。

（結果）

19年産大豆の播種よりすべてのほ場で実施。大豆の播種時に降雨が少なかったため慣行栽培との明確な発芽率等の差は認められなかった。播種同時作業であるため作業が楽である。

（留意点）

・暗きよ、額縁排水と一体的に実施し排水効果を高める。



<簡易培土板による畦立て播種>

◎主な波及活動

- ・県や市が主催する「稲作技術研修会」、「大豆300kgとり講習会」や「儲ける水田農業研修会」にモデル事業の成果を発表した。
- ・他地域の視察受入れや講習会会場の提供など集落営農のとりくみも含め水田農業のモデルとなっている。



<簡易培土板の紹介：播種実演会>



<大豆播種実演会で説明する高山事務局長>

【経営状況】

(10aあたり)

	労働時間(県平均比)	全算入生産費(県平均比)	所得
経営全体	10.0hr(57%)	21,149円(43%)	20,018円
水 稻	—	—	
麦	—	—	
大 豆	—	—	